



同輩集団における経験知

以前に、「分人主義」のお話について書きました。

自分の存在は、いつも周りの誰かによって引き出され、作られています。

人間にはたった一つの「本当の自分」がどこかにあるわけではなく、その場に応じてふる舞い方や立ち位置を自然と変えているということです。



例えば、「学校に通う」という一つのシーンを切り取っても、子どもたちはその中の場面ごとに自然と振舞い方を変えています。

登下校のバスの中。

各教科の授業。

休み時間。

アフタースクール。

一つ一つの授業においてすら、担当の先生が変わるだけで子どもたちの様子は大きく変わります。特に、子ども同士の関係（同輩集団）におけるやり取りの中では、その変化は明らかです。

今回は、この「同輩集団における関わり」に焦点を当ててみます。
先日、日経のあるオンライン記事を目にしました。
タイトルは

なぜ？ 小1の暴力件数が8年で5倍以上に

「小1プロブレム」現象に伴って増える暴力行為、背景に群れて遊んだ経験の減少
です。全ての記事を紹介すると長いので、要点だけを抜粋します。

表1 暴力行為の加害者数の変化

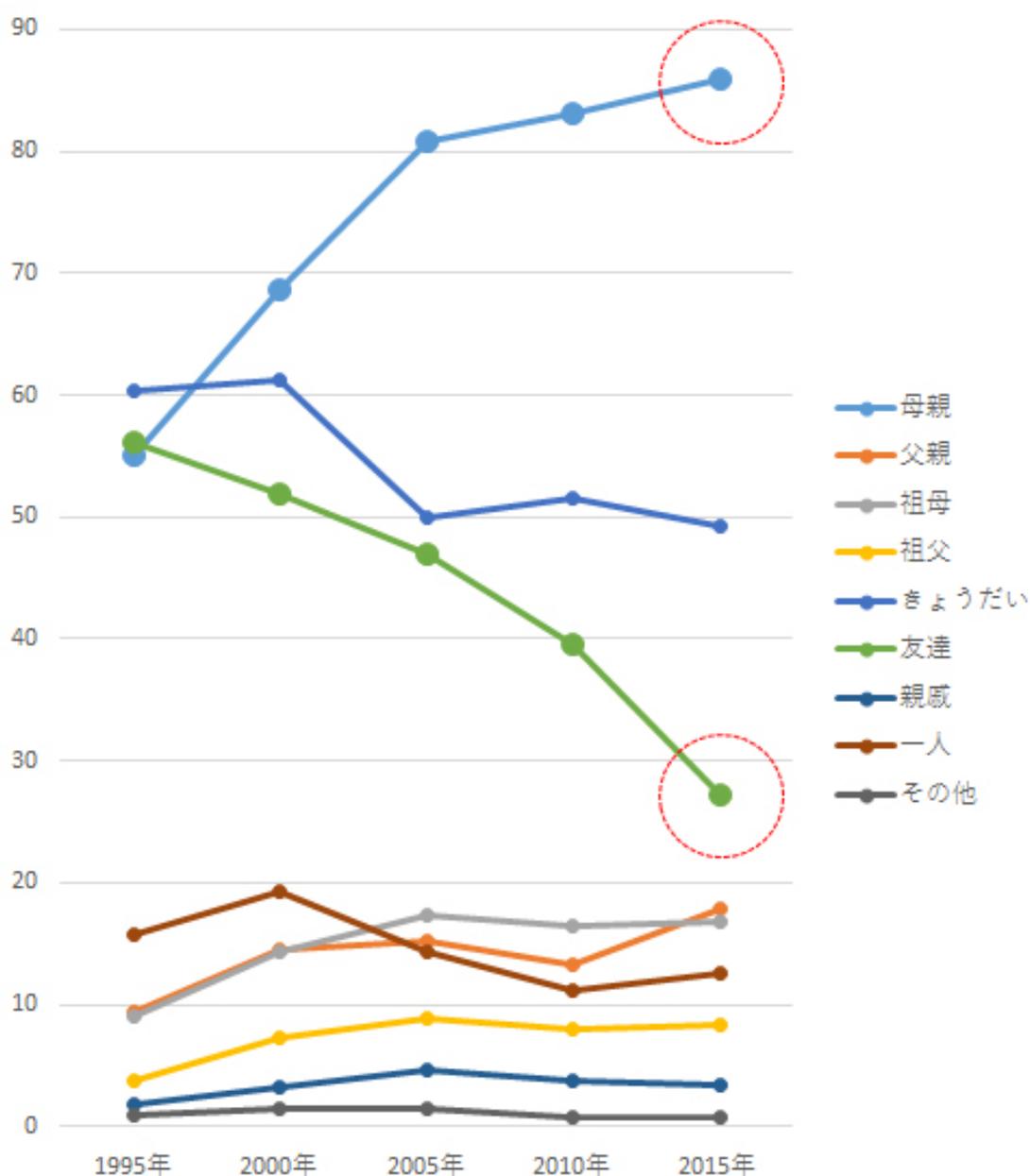
	a	b	b/a
	2006年度	2014年度	増加倍率
小学校1年	123	623	5.07
小学校2年	238	1,018	4.28
小学校3年	316	1,318	4.17
小学校4年	529	1,989	3.76
小学校5年	869	2,648	3.05
小学校6年	1,720	3,217	1.87
中学校1年	7,361	11,389	1.55
中学校2年	11,533	13,091	1.14
中学校3年	12,841	11,144	0.87
高等学校1年	6,255	4,134	0.66
高等学校2年	3,858	2,775	0.72
高等学校3年	2,148	1,518	0.71

(前略) この8年間の増加倍率に着目すると、**年少の児童ほど高くな**っています。学校に上がって間もない**小学校1年生では、5倍以上**に増えています。「小学校1年生の暴力って何だろう？」と思ったりしますが、さすがに**対教師暴力**などは皆無でしょう。相手にケガをさせたケンカ(児童間暴力)や、教室内の器物損壊などが大半であると思われます。近年、小1児童の学校生活への不適応が問題になっています。東京都教育委員会(都教委)の実態調査の定義を借りると、「入学後の落ち着かない状態がいつまでも解消されず、教師の話を聞かない、指示通りに行動しない、勝手に授業中に教室の中を立ち歩いたり教室から出て行ったりするなど、授業規律が成立しない状態へと拡大し、こうした状態が数カ月わたって継続する状態」です。2012年の都教委調査によると、都内の公立小学校の5分の1で、こういう状態になっていたとのこと。

関係者の間では、「小1プロブレム」現象として知られています。表1でみた暴力行為の加害者の激増は、これに伴っているといえるでしょう。

なぜ、こういう事態になっているのか。小学校1年生といたら、幼児期の生活の影響をとどめていると思いますが、就学前の過ごし方に何か変化でも起きているのでしょうか。この点について、ベネッセ教育総合研究所が興味深いデータを公表しています。図2は、乳幼児の遊び相手の変化をグラフにしたものです。就学前の乳幼児がいる親御さんに、子どもの主な遊び相手を複数回答で尋ねた結果です。

図2 乳幼児の遊び相手の変化 (%)



この20年間で「友達」が減り、「母親」が増えています。1995年では同じくらいの選択率でしたが、その後どんどん差が広がっています。複数回答の選択率ですが、幼児は外で友達と遊ばなくなり、母親の庇護下に置かれるようになっていくことがうかがえます。

子どもを狙った犯罪が多発しているのも、子どもを外に出さない親御さんが増えているのでしょうか。早期受験の広がりにより、塾や習い事に通う幼児が多くなっていることも考えられます。

今の子どもは群れて遊んだ経験に乏しいのではないか

昨年、都内の公立学校の先生方を対象とした講演で、「小1プロブレム」現象についてお話ししたのですが、ある小学校の副校長先生が「今の子どもは、学校に上がる前に、友達と群れて遊んだ経験に乏しいのではないか」とおっしゃっていました。なるほど、上記のデータをみるとさもありなんです。

小学校に上がるとタイトな集団生活が始まりますが、**同輩集団（peer group）で群れた経験に乏しい子どもがいきなりそこに放り込まれたら、諸々の不適応が起きるのは道理**です。

幼い子どもは庇護されるべき存在ですが、そればかりではいけない。大人が適度に見守りつつ、彼らだけの世界も尊重されなければなりません。**対等な仲間集団において、欲求をぶつけ合い、それを調整する術を学ぶ**。そのことが、他者との社会生活が営める社会的存在としての自我を内面化させることにつながります。（後略）

記事全文を読みたい方は、以下をご覧ください。

<https://dual.nikkei.com/article/O86/64/>

私も全国に教員の仲間がいますが、各地で軒並みこの「小1プロブレム」に頭を悩ませている話がよく耳に入ってきます。

SOLANも決して例外ではなく、暴力や暴言についての指導はほぼ毎日と言っているほど行ってきたのが現状です。（各クラスで朝一番から暴力は決して行ってはならないことを伝え続けてきています。）

4・5月に比べて、それが相当減ってきたことに我々も大きな成長を感じていますし、今後も様々な形で指導は続けていくわけですが、大切なのはその暴力件数等の多さに関して「どこに解決の糸口があるのか」を把握することだと思っています。

この記事の中では、「同輩集団における関わりの少なさ」に焦点が当てられていました。

もちろん、これだけが原因の全てとは言い切れませんが、少なくとも教育に携わるものとしては知っておいた方がよい情報だといえます。

尚、この記事はコロナ禍以前の記事です。

恐らく、ここ数年でこのデータには拍車がかかっているとみて間違いのないでしょう。

この教育社会学者の論が的を射ているならば、小1プロブレムのリスクは近年ますます高まっていると見ることができます。

思えば、私が小学生になった頃と現代では、確かに入学以前の子ども同士の関わりは大きく減っていると感じます。

保育園や幼稚園など、「公の場」で「大人の目」がある中での関わりの時間はさほど変わらないかもしれませんが、シンプルに子ども同士だけで私的に遊ぶ機会は減り続けていることを先のデータが示しています。

小学校に入ってから、バスの中、休み時間、アフタースクールなど、同級生同士での関わりが一気に濃くなる中で、「群れて遊ぶ経験」を子どもたちは今まさに経験しているところです。

その中におけるトラブルはどうしても起きてくるものですが、先の記事にもあった「対等な仲間集団において、欲求をぶつけ合い、それを調整する術を学ぶ」こともまた大切な学びなのでしょう。



この内容に触れようと思ったのは、6月に入ってからお家の方々が子ども同士を遊ばせる企画を積極的に開催して下さっていることを知ったからです。

最近目に見えて子どもたちの暴力行為などが減って来た背景には、こうした子ども同士のつながりや遊ぶ経験を増やそうとして下さっている方々のおかげであると感じているところです。

紙面を通じて、心からお礼申し上げます。

日々の学校生活をがっちりと支えるだけでなく、休みの日にも子どもたちの健やかな成長を支えて下さる姿に、大きな勇気をいただいています。

私自身も、保護者の方々と会食等を通じて色々な場でお話できることが増えてきました。

先日の SOLAN カフェしかり、学年通信の投稿欄然り、保護者の方々との繋がりを豊かなものにできるように、また我々も色々とアイデアを出して取り組んでいこうと思います。

そしてもう一つ。

先の記事を見て私が引っ掛かったのは、「父親」のグラフが20年間ほぼ横ばいであることでした。

いち父親として、我が子と遊ぶ機会をしっかりとれるようにしていかないとなあと反省したところです。

お母さんに任せきりにならないように、親父も頑張りたいと思います。

(文責：渡辺道治)

[1 学年通信「コスモスハーモニー」読者ページ \(google.com\)](#)